

生物的防除部会

2021年度 第1回オンライン講演会のお知らせ

下記のとおり生物的防除部会 2021年度第1回講演会を下記の通り開催いたします。
会員の皆様はじめ多くの方がご参加くださいますようお願い致します。

記

日時 : 2021年6月15日(火) 午後13時00分~16時00分

演題1 「生物的防除部は昨今産地でどのように評価されているのか」

柿元 一樹 氏 (株)Field Styled Lab 13:00 ~ 13:45

< 講演要旨 >

FAOがIPM(総合的病害虫・雑草管理)の考え方を明確に定義してから約半世紀が経つ。IPMの一翼を担う生物的防除の中でも、天敵昆虫・ダニを利用した害虫防除技術は、長年の基礎研究の積み上げや産地での試行錯誤がようやく実を結び、ここ十数年で飛躍的に普及した。果菜類を中心とした施設園芸では、アザミウマ類、コナジラミ類、ハダニ類に対して広食性カブリダニ類をベースとしながら、複数の天敵を組み合わせる体系が一般化しつつある。また、アブラムシ類に対するバンカー法も少しずつ普及を始めている。施設での生物的防除の普及が契機となり、鹿児島県では生物的防除が導入されている露地野菜もある。では、生物的防除は実際の生産現場ではどのように評価され、取り入れられているのか。演者が長年携わってきた鹿児島県における事例を中心に紹介させていただく。

演題2 「二次植物栽植によるタマネギおよびキャベツ害虫の抑制効果」

関根 崇行 氏 宮城県農業・園芸総合研究所 13:45 ~ 14:30

< 講演要旨 >

演者らはこれまでにタマネギおよびキャベツ圃場に大麦を間作することで、複数の害虫種が抑制できることを示した。宮城県では農研機構とともに「天敵温存植物・間作を利用した土着天敵保護強化による露地野菜害虫防除技術の開発(平成30~令和2年度)」に取り組んできた。本事業では大麦の間作に加え、開花植物を圃場周辺へ栽植することで、土着天敵の機能をより積極的に活用し害虫を抑制することを目的とした。その結果、ネギアザミウマ、アブラムシ類を初めとした複数害虫種に対し、大麦間作のみの導入よりもさらに高い抑制効果が認められた。本講演では、その抑制効果と有望な天敵種、利用上の注意点や今後の展望などを紹介する。

演題3 「環境に配慮した有害線虫の効果的防除技術の開発」

奈良部 孝 氏 北海道農業研究センター 14:30 ~ 15:15

< 講演要旨 >

植物寄生性線虫は寄主植物から効率的に栄養を摂取し子孫を残すため、種に応じた生理的・生態的進化を遂げている。先駆者達はそれら特性を究明する過程で、防除に生かせる特性(弱点)を見出し、実際の防除法開発につなげてきた。本講演では、これまで演者の携わった研究事例から、わが国の代表的な植物寄生性線虫と防除資材の組み合わせによって、化学農薬に頼らず線虫制御に成功した事例を紹介する。主な事例は、ネコブセンチュウー天敵細菌、ネグサレセンチュウー対抗植物、ジャガイモシストセンチュウー抵抗性品種・捕獲作物・ふ化促進物質、など。実証試験で想定通り(想定以上!)の防除効果が得られた瞬間の、研究の醍醐味を皆様と共有したい。

演題 4 「バイオスティミュラントの EU、EPAでの法制化の現状などについて」

和田 哲夫 氏 生物的防除部会 副会長 15:15 ~ 16:00

< 講演要旨 >

2019年、EUにおいてバイオスティミュラントが、新肥料法によりカバーされるといが確定した。概略は昨年発表されているが、詳細については現時点では明らかにはなっていない。一方で、米国 EPA, USDA は、バイオスティミュラントと米国農薬取締法である FIFRA においてカバーされる PGR とそれ以外のバイオスティミュラントについての効能の表現について、細目を発表し、昨年パブリックオピニオンを問うている。

日本では、日本バイオスティミュラント協議会が 2019 年に発足し、その会員数は毎年増加しており、協議会として、日本でのバイオスティミュラントの規格、表現、などについて、一定の指針をだすべく活動中であり現状を報告する

< オンライン講演会参加 申し込み要領 >

講演会への参加を希望される方は、以下の URL もしくは当会 HP(「生物的防除部会」で検索)より参加申込フォームにアクセスし、お名前とメールアドレスをご入力の上送信してください。後日、Zoom の接続情報をお知らせします。

<https://forms.gle/7KhWoQgmmacHziEp6>